

本学研究者における附属図書館利用の意義 —本学で利用可能なオンライン・リソースを中心に—

奈良県立医科大学法人企画部学務課医学情報係
鈴木 孝明

Significance of the Use of Nara Medical University Library for Researchers
—Mainly on Online Resources Available in NMU—

Takaaki SUZUKI

I はじめに

医学・看護学研究を行うにあたって、研究者自身の研究テーマおよびその関連領域の過去の文献を読むことには、いくつもの重要な機能がある。(Murrell et al. 1992)

(1) その研究分野において、現在どのようなことが知られているかについての情報が得られる。そして、どのような研究がこれから意義があるのかということがわかる。

(2) その研究で用いられた研究テクニックの詳細がわかる。

(3) 過去の研究論文は、自身の研究論文の2つの重要な部分、イントロダクションと討論の項の構成要素となる。

また、医学教育においても最新の理論や動向を知るために文献を読むことは欠かせない。

そのためには、文献検索を行い適切な文献を入手するスキルを身につけることが非常に重要となる。

医学図書館では長い間、医学・看護関連文献を収集・蓄積・保存すると共に、その有効活用のために目録情報や文献データベースを整備し、その使用にも精通してきた。今では、インターネットが普及し、電子ジャーナルやWeb版データベースなどのオンライン・リソースが主流となってきた。それらのリソースの最新動向を把握し、機関にとって有用なリソースの使用ライセンスを取得・管理すると同時に、それらの使用法に習熟するよう日々

研鑽している。また、機関内では入手し得ない文献を他機関から取り寄せるネットワークを形成し文献入手を代行している。

本学附属図書館もまた、これらの機能を備え、本学の教育・研究を支援するポテンシャルを有しているが、本学の教育・研究者がどの程度当館を活用されているのか懸念しているところである。

本稿では、文献検索、文献入手の二つのプロセスに主眼を置き、本学において利用可能なオンライン・リソースならびに当館が提供しているサービスについて概説していきたい。

II. 文献検索

ある特定テーマを主題とした文献(一次資料と呼ぶ)を探すにあたっては、文献を探し出すための資料が必要となる。この資料を二次資料と呼び、看護学を含めた医歯薬理工系分野では早くから各種二次資料が発行されている。

1. 医中誌 Web (医学中央雑誌)

医学中央雑誌は医学系で代表される二次資料であり、1903年(明治36年)に創刊された。最大の特徴は国内で発行された医学・歯学・薬学およびその関連領域から“網羅的”に文献情報を収集していることである。本稿の掲載誌「奈良県立医科大学医学部看護学科紀要」もまた収載対象となっている。

当初は冊子体で刊行されていたが、時代とともにメディアが変遷し、CD-ROM版を経て現在では冊子体もなくなり、インターネットを通じたWeb版のみとなり、1983年以降に発行された約5,000誌から約670万件もの文献情報が収録されている。なお、1983年以前に発行された文献を探すためには、冊子体にあたる必要がある。

当館ではWeb版の利用契約を結んでおり、学内限定で同時に4台までのインターネット端末からアクセスできる。また、1908年(明治41年)から1983年(昭和58年)までの冊子体を保管しているの、利用を希望される場合はメインデスクへお申し出いただきたい。

医中誌Webを含め、有料のデータベースにはシソーラスが大抵備わっている。ある特定の概念、例えば「褥瘡」について言えば、「褥創」、「褥瘡性潰瘍」、「床ずれ」などの表記も考えられる。「褥瘡」について書かれた文献を検索する時、検索漏れを防ぎたいければ、これらの異なる表記を含む文献をまとめて拾う必要がある。その手助けをしてくれるのが、統制語(件名)であり、統制語を集めた辞書をシソーラスと呼んでいる。医中誌の場合、「褥瘡」を主題とする文献データには、シソーラス欄に「褥瘡性潰瘍」という統制語が付与されている。他の表記が使われている文献も、シソーラス欄に共通して「褥瘡性潰瘍」が付与されているので、「褥瘡性潰瘍」で検索することにより、表記の違いを意識せずにまとめて拾うことができる。

一方、ある思いついた言葉(自然語と呼ぶ)で検索した時、その自然語に該当する統制語を自動的にシソーラスから拾い出し検索に加える機能を自動マッピング機能と呼び、医中誌も備えている。「褥瘡」で検索すると、自動的に「褥瘡性潰瘍」でも検索してくれるので、統制語を意識せずに漏れの少ない検索をすることができる。

2. JDream II

独立行政法人科学技術振興機構(JST)が

提供している科学技術全般および医学・薬学系の文献情報データベースサービスである。扱っているデータベースは科学技術全般をカバーするJSTPlusや医学・薬学系のJMEDPlusなどがあり、別に医学・薬学予稿集全文データベースも備えている。前述の医中誌Webと扱うデータが重複する部分もあるが、シソーラス体系が異なる上に、理工学系の周辺領域もカバーしているので、幅広い範囲で検索できるのが特徴である。

日本看護協会の会員であれば、JMEDPlusおよび医学・薬学予稿集全文データベースを無料で利用できるようである。

3. 雑誌記事索引(国立国会図書館)

国立国会図書館が無料で提供しているサービスであり、国内で発行・販売されている雑誌を記事単位で検索できるものである。看護関係の雑誌も平成12年発行分ぐらいから充実してきている。また、医学関連分野だけでなく全分野の雑誌を扱っているので、医中誌ではヒットしない周辺領域の文献も拾うことができる。

ただし、マッピング機能がないので、検索語の同義語、類義語が考えられる場合はそのすべてで検索しないと検索漏れが生じてしまう。

4. CINAHL(シナール)

海外で発行されている看護関連文献を探するのに欠かせない二次資料がCINAHL(Cumulative Index to Nursing and Allied Health Literature)である。米国を中心とした看護関連資料が収録され、学術雑誌だけでなく、書籍、学位論文、AV資料、測定用具など多種の形態の資料が対象となっている。更に搭載されているシソーラスは、CINAHL Subject Headingsと言い、PubMed(後述)で使われているMeSH(メッシュ)だけでなく、看護診断や看護介入などで使用されている各種看護分類用語も採用されている。

看護領域の網羅的な検索には必要なデータ

ベースではあるが、本学で所蔵していない、あるいは利用できない資料が多いので、文献入手の手間と負担が多いのが実情である。

2007年までは数社から提供されていたが、2008年からEBSCO（エブスコ）社一社からの提供となっている。

本学では、1981年以降発行の文献を学内限定で同時4台まで検索が可能である。

5. PubMed（パブメド）

米国において、医中誌的存在のデータベースがPubMedであるが、決定的な違いは無料で利用できることである。インターネットが普及するまでは、MEDLINE（メドライン）という名称で数社から電話回線を通じて有料で提供されていた。従量制で、接続時間と出力件数によって料金が算出されるため、キーワードの設定など事前準備が欠かせなかったし、タイプミスにも気を使ったものである。提供元は米国の国立医学図書館（National Library of Medicine）という国の機関であるため、無料で利用が実現した。

その膨大なデータ量は言うに及ばず、機能も多種多様で、この使用マニュアルだけで1冊の書籍ができるほどであるが、機能の追加・変更がしばしば行われるため、時間を置いて使用する場合はそのあたりの確認も必要であろう。確認するには、PubMed検索画面の左側メニューにある、「New/Noteworthy」を選べば時系列で確認することができる。

PubMedで採用されているシソーラスは、MeSH（Medical Subject Headings）と呼ばれ、医学関連用語を網羅し概念の上下関係を明確に定め階層構造を成している。一つの文献には複数のMeSH用語が付与されているが、その文献にとって特に重要な用語にはアスタリスク（*）が付けられ、「MeSH Major Topic」と呼ばれている。更に、MeSH用語の概念を特定するために副標目（Subheadings）が設けられている。例えば、褥瘡の看護に関する文献にはMeSH欄に「Pressure Ulcer/nursing」と記述される。MeSHは毎年改訂が行われ、新

しい概念、技術などを取り入れている。医学・看護の専門知識を有さない我々図書館職員が体系的に医学用語を学習する際にも便利な用語集である。

補足であるが、一般に論文の最後に付される参考文献欄に雑誌論文を列記する際の略誌名、例えば、「American Journal of Nursing」は、「Am J Nurs」と表記されるが、正式誌名⇄略誌名を調べるには、PubMed検索画面の左側メニューにある「Journals Database」が便利である。

6. Google Scholar（グーグル・スカラー）

今やインターネットをされる方で、Googleを知らないという人はいないほど有名な検索サイトとなっているが、その収集対象を学術情報に特化させたサービスがGoogle Scholarであり、ベータ版として提供されている。

検索結果には電子ジャーナルも多く含んでおり、日本語文献にも対応している。近年、国立大学を中心として、自機関の研究成果を電子的に蓄積・保管すると同時に学内外に公開する目的で機関リポジトリ・サーバーの設置が広まってきている。Googleにそのサーバーの情報を提供することにより、Google Scholarの検索結果に機関リポジトリへのリンクを含めることができる。

本学においても、2007年度に機関リポジトリの設置が認められたため、図書館にサーバーを設置し機関リポジトリを立ち上げることができた。本学の所在地、奈良県橿原市内にある橿原神宮に祀られている神武天皇にあやかり、「Global Institutional repository of Nara Medical University」の頭文字を取り、「GINMU（ジンム）」と名付けた。2009年2月時点では、まだ試験運用段階であるが、当紀要もGINMUへの掲載対象となっており、本稼働の暁にはGoogleへ申請する予定である。

このように各研究機関が公開している文献をGoogle Scholarで探し出すことができるようになってきた。

7. 電子ジャーナルの各ベンダー・サイト

学術論文も今では電子的に提供されることが当たり前となってきた。これらを提供する業者（ベンダー）が運営・管理しているサイトからも自社製品の検索をすることができる。大きく二つに分かれ、自社で発行している電子ジャーナルを提供するベンダー（ScienceDirect、Wiley InterScience、Springer LINK など）と、複数出版社の電子ジャーナルを集めて提供するベンダー（ProQuest、InformaWorld、IngentaConnect、Journals@Ovid、メディカルオンラインなど）がある。後者をアグリゲーター（Aggregator）と呼ぶが、両者とも検索機能を持たせている。

契約内容にもよるが、そこでの検索結果から文献全文が入手できる確率が高いので、網羅的でなくてもいいから適合文献を即座に入手したいときには有用である。

Ⅲ. 文献入手

1. 所蔵調査

文献検索により、必要な文献が見つければ、次にはそれらの文献の入手作業に取りかかることになるが、この作業は実に煩雑である。

ある文献の所在を確かめるには、以前は冊子体しかなかったので、当館で所蔵していなければ他機関へ文献複写依頼をするしか方法がなかったのであるが、電子ジャーナルが普及してきた現在では、まず電子ジャーナルからあたることになる。PubMed や医中誌 Web などでは、検索結果が電子ジャーナルで提供されている場合、それを提供している出版社のサイトへ直接リンクが張られている。当該ジャーナルを購読していれば全文を入手できる。

問題は、検索結果にリンクがない場合や、リンク先で、ユーザー名／パスワードの入力画面が表示され全文にアクセスできない場合である。ここからは段階がある。まず、固定されたリンク先以外に提供されているケース

がある。つまり一つのタイトルが複数のベンダーから提供されている場合があるので、その確認が必要である。当館ホームページの左側メニューにある「雑誌リスト：オンライン版」をクリックするとタイトルのアルファベット順に並んだリストを見ることができる。中には無料で見られる（オープン・アクセス）タイトルも含んでいるが、見ることができる発行年の範囲がタイトルによって異なるので確認が必要である。ただし、そこに記載されている範囲だけに限られるとも限らないのがややこしいところである。サンプル的にある号だけ無料にしている場合もあるし、タイトルによっては著者から料金を徴収し、当該論文を無料でアクセスできるようになるオプションを設けている場合もある。逆に版元の方針が変わったり、版元自身が変わることでアクセスできる範囲が急に変わってしまうこともある。図書館ではそのすべての変化を把握することが困難であるので、オンライン版雑誌リストとアクセス状況が異なっている場合はご一報いただきたい。

次に電子ジャーナルで提供されていない、あるいは契約していないためアクセスできない場合、冊子体を探すことになる。当館ホームページ左側メニューの「所蔵資料検索」をクリックすると検索画面が表示され、当館を含めた本学内の所蔵調査ができる。書籍、冊子体雑誌、AV 資料が対象となっているので、雑誌を探そうとする場合は、画面左上にある「検索対象表示」をクリックし、「検索対象」が現れたら、右下にある「継続マスタ」にチェックを入れて、「検索語」欄の「タイトル」に探したい誌名を入力すれば、雑誌だけに絞った検索ができる。ただし、すべての所蔵雑誌が掲載されていないので目安としていただきたい。

基本的には、上記の2段階を経て見当たらなければ当館へ問い合わせあるいは、文献複写の申込をしていただきたい。

2. 電子ジャーナル

表 1 電子ジャーナル・ベンダー一覧（2009 年度本学契約予定）

出版社またはプラットフォーム名	契約形態	タイトル数
Journals@Ovid (LWW ほか)	パッケージ (Fixed 50 Collection/コンソーシアム) +個別	59
Wiley InterScience	パッケージ (STM Collection/コンソーシアム)	753
Oxford University Press	パッケージ (Biomedical Collection/コンソーシアム)	74
Springer LINK	パッケージ (コンソーシアム)	1817
JAMA & Archives (AMA)	パッケージ (コンソーシアム)	10
ProQuest	パッケージ (コンソーシアム)	1216
メディカルオンライン	パッケージ	675
Nature Publishing Group	個別 (コンソーシアム)	17
BMJ Publishing Group	個別	6
Elsevier ScienceDirect	個別	68
その他	個別	60
タイトル計		4755

紙に印刷されていた学術雑誌を電子化したものを電子ジャーナルと呼ぶ。現在ではそのほとんどがインターネット（オンライン）上で提供されているので、オンライン・ジャーナルとも呼ばれている。

1990年代から出現した電子ジャーナルは、当初は印刷版の付録的な位置づけであったが、インターネットの普及と相まって今ではオンライン版が主となり、印刷版がオプション扱いになってきている。

電子ジャーナルが始めた頃、当館では雑誌価格高騰による購読タイトル数の減少、書庫の狭隘化が深刻化しており、その打開策として平成 11 年度から電子ジャーナルの導入を急速に進めていった。表 1 は平成 21 年度に本学で契約予定の電子ジャーナル一覧である。

電子ジャーナルはその発行形態、購読形式などによって、いろいろに分類できる。

1) 有料

形態はオンライン版となっても、基本的には印刷版と同様にタイトル単位で購読価格が設定されている。印刷版に比べ発送の手間や送料がかからない分、割安となる。

ところが、Nature や Science などのメジャ

ーな雑誌を抱える大手出版社にとっては、大学のような機関に対して今まで印刷版では何部も売れていた雑誌がオンライン版に転換されることによって、次々と購読を中止され売上げ減少につながることから、その対策に様々な契約様式が考案されてきた。

(1) サイトライセンス

研究所、単科大学、総合大学など Tier と称して機関の規模に応じて価格を決める場合と FTE (Full Time Equivalent) と称する常勤スタッフ数に応じて価格を決める場合がある。また、総合大学のようにキャンパスが何ヶ所かにまたがる場合は、マルチ・サイトライセンスが適用される場合が多い。

(2) パッケージ契約

現在購読しているタイトルを次年度もそのまま継続すれば、それ以上の数のタイトルをまとめて利用できますよ、というもので Biomedical コレクション、STM (Science, Technology & Medicine) コレクションなどあらかじめタイトルが決められている場合が多い。ある決められたタイトル群の中から何誌以上購読すれば何パーセント割引きますよ、という場合もある。

ただし、この契約方式を「Big Deal」と称して批判される向きもある。一度パッケージ契約をしてしまうと、契約を中止または個別購読に戻すことが困難となるからである。

(3) バックナンバー買い取り

通常は1年単位で購読契約を結ぶが、創刊号から例えば10年前までのバックナンバーをまとめて利用できる権利を買い取るというもので多くはパッケージ化されている。

ただし、毎年メンテナンス料金を課すものもある。

(4) Pay-Per-View (ペーパービュー)

タイトル単位でなく、文献単位で課金するもので、20~30ドルほどでダウンロードできる。図書館を通して取り寄せる文献複写料金に比べるとかなり高価であるが、PDFファイルなど電子的に入手できる点が異なる。

(5) 従量制

現在まで電子ジャーナルはタイトルや機関規模によって価格が決まる定額制である(と言っても毎年価格は値上りしているのだが)が、前年に利用された頻度によって翌年の価格を決めようとする動きもある。ただ、これが適用されると雑誌購読予算の見当がつきにくくなると懸念している。

(6) コンソーシアム契約

毎年の雑誌価格高騰の対策として、同じ境遇の機関が集まり、共同でベンダーと交渉することにより購読価格を割り引かせたり、割安なパッケージ契約を設定させたりする動きもある。当館も、日本医学図書館協会と日本薬学図書館協議会が合同で設立したJMLA/JPLA コンソーシアムと私立大学と公立大学が合同で運営している公私立大学図書館コンソーシアム(PULC)に加入している。

2) 無料

有料のものに対して無料で利用できるものも多く発行されているが、こちらも多種多様なものがある。

(1) オープンアクセス・ジャーナル (時実2007)

学術雑誌の価格は、物価の動向とは無関係に毎年上がり続けているため、各機関は購読中止を余儀なくされてきた。このままでは学術情報流通にも悪影響が出るという危機感(シリアルズ・クライシスと呼んでいる)(土屋 2004)から大手出版社に対抗して読者に無料で提供する電子ジャーナルが出現した。オープンアクセス・ジャーナルと呼ばれ、BioMed Central や PLoS (Public Library of Science) が代表的な出版社である。これらを発行する財源は寄付、広告料あるいは投稿者負担などでまかなわれている。

ただし、大手出版社の中でもサンプル的に一号まるまる無料にする場合もあれば、投稿時のオプションとして投稿者から料金を徴収した文献を無料で見られるようにするサービスも出てきた。したがって購読していない雑誌でも無料で見られる文献がある場合もあるので確認を要するところである。

日本では、学協会誌や紀要を中心としたタイトルを無料で公開しているサイトがある。前出のJSTが提供するJ-STAGEと国立情報学研究所(NII)が提供するCiNii(サイニイ)である。すべてのタイトルが無料ではないが、相当数が無料で利用できる所以要チェックである。

(2) Embargo (エンバーゴ)

学協会を中心に創刊号からあるいはある年から最近までの範囲を無料で利用できるタイトルが増えてきた。最近までというのが出版元によって異なり、例えば発行6ヶ月後に無料となる場合、6ヶ月のEmbargo有りなどと称されている。

(3) 機関リポジトリ

前述のシリアルズ・クライシス対策の一つとして、各研究機関が自機関の研究成果を電子的にサーバーへ蓄積、保存し無料で公開しようという動きが欧米の大学を中心に広まっている。日本でもNIIが音頭をとって国立大学を中心に導入を進め、本学も平成19年度に導入を認められて現在では試験運用を行っているところである。ただし、コンテンツを収

集するに当たっては各文献の著作権をクリアする必要があり、登録件数を増やす障壁となっている。紀要や年報など自機関で発行している出版物は著作権処理が容易なため着手しやすいが、商用出版社が発行している電子ジャーナルに投稿されたものは、著作権が出版社にあるため出版社が提供する全文データをそのまま機関リポジトリへ載せることを許しているケースは少ない。査読前の原稿や査読後の著者最終稿なら投稿者が所属する機関内のリポジトリに限って載せてもいいという出版社は多いが、投稿者自身がそのような原稿を手元に保管しているか否かが重要なポイントとなる。

いかに研究者に有用なコンテンツを収集していくかが、機関リポジトリの大きな課題である。

3) 電子ジャーナル利用上の注意点

電子ジャーナルを契約するにあたって、ベンダーとの間で不正使用の禁止等を含めた契約書 (License Agreement) を交わしている。

電子ジャーナルを利用するにはベンダー・サイトへアクセスするため、ベンダーは利用状況を逐一確認できる。そのため、冊子体では発覚し得なかった大量ダウンロードなどの不正使用が発覚するケースが出てきた。その場合、本学に対する損害賠償請求や使用停止の処置があり得るのでご注意願いたい。

3. 電子ブック

文字通り電子版の図書であり、洋書の医学関連図書はかなり電子化が進んでいる。本学では、「STAT!Ref」を導入している。これは「ハリソン内科学」や「グッドマン・ギルマン薬理書」など任意の図書を選んで購読することができる。その中には図書ではないが、米国内科学会 (ACP) が作成している EBM 実践ツールとして高い評価を受けている「ACP-PIER」も含まれている。

国内では電子化が進んでいないが、医学書院から「今日の治療指針」や「今日の診断指

針」などをまとめた「今日の診療 WEB 版」が提供されており本学でも同時 3 ユーザーまでの利用が可能である。

4. EBM 実践支援ツール

1980 年代に EBM の手法が提唱されて以来、今日の医療界では広く受け容れられてきているが、看護の世界においても EBN と呼ばれ、エビデンスに基づいた看護実践に向けて、様々な取り組みがされている。2009 年からは、MeSH 用語にも、「Evidence-Based Nursing」が採用されている。

実際にエビデンス・レベルの高い情報を探すには、PubMed や CINAHL の膨大なデータの中からでは時間も手間もかかる。そこでその手間を軽減するための様々なツールが提供されており、本学で利用することができるものを紹介する。各ツールで「褥瘡の予防」について調べ表 2 にまとめた。いずれも 2009 年 2 月 19 日時点の結果である。

1) コクラン・ライブラリー (The Cochrane Library) (吉村 2008)

コクラン共同計画の下で疾患別にグループが組まれてエビデンス・レベルが最高といわれる RCT (ランダム化比較試験) 文献を中心に収集しメタ分析した結果をまとめたコクランレビュー (Cochrane Database of Systematic Reviews) がこのデータベースの“うり”である。また、コクランのグループ以外のレビューや MEDLINE などから収集した RCT および準ランダム化比較試験 (CCT) 文献も掲載されている。本学では Wiley InterScience から利用できる。

2) ダイナメッド (DynaMed) (飯田 2008)

ポイント・オブ・ケアでの利用を目的に医師により開発された臨床系レファレンス・ツールである。CINAHL を提供している EBSCO 社から提供されている。

疾患別にアルファベット順に配列され、疾患ごとに診断、治療、予後、予防など 12 項目に分けて記載されている。

3) ACP PIER & AHFS DI® Essentials (小林

表2 褥瘡の予防に関する各リソース調査結果 (2009.2.19)

No.	リソース名	検索式：1-5 手順：6-9	ヒット件数：1-5 参考文献数：6-9	掲載範囲
1	医中誌 Web	褥瘡性潰瘍（予防）	3630	1981-2008
2	JDream II (JMEDPlus)	褥瘡(L)PC/CT+(褥瘡/CTS*予防/CTS)	3092	1981-2009
3	PubMed	Pressure Ulcer/prevention and control	3257	1952-2008
4	CINAHL	(MH "Pressure Ulcer/PC") or (MH "Pressure Ulcer Prevention (Iowa NIC)")	2614	1981-2009
5	The Cochrane Library	pressure ulcer prevention	7 (Cochrane Reviews) 8 (Other Reviews) 185 (Clinical Trials)	1967-2008
6	DynaMed	P > Pressure ulcer > Prevention and Screening > Prevention	19 11 (褥瘡全体 Review)	1992-2008
7	ACP-PIER	Diseases > "P" Diseases > Pressure Ulcers > 1.PREVENTION	27 17 (褥瘡全体 Article, Review)	1958-2008
8	Up-To-Date	pressure ulcer prevention > Prevention of pressure ulcers	39	1975-2008
9	クリニカルエビデンス・コンサイス	褥瘡>褥瘡発症リスクのある人における予防的介入の効果は？	51 (褥瘡全体)	1991-2006

2008)

American College of Physicians – Physicians' Information and Education Resource の略で、前述した「STAT!Ref」上で利用できるツールである。大きく5つのカテゴリー、つまり疾病、スクリーニングと予防、代替医療、倫理と法的手段、手技に分けられている。カテゴリーごとに一定の様式で構成され、重要な項目を箇条書きでまとめている点が特徴である。更に米国ヘルスシステム薬剤師会が作成する医薬品情報も含まれている。

4) Up-To-Date (山本 2008)

臨床医向けに開発されたツールでトピック数が他のツールに比べて多いので、臨床上の疑問に対して何らかの回答を得ることができる。逆を言えば、明確なエビデンスがない場合、専門家の意見も取り入れられている。当館の利用者用端末の1台で利用できる。

検索ボックスに自然語を入力するとヒット

した項目が一覧されるので、該当するものを選ぶと本文が表示される。他のツールに比べると長い文章が続くが、平易な文体で読みやすく書かれている。一連の説明文の後に、それらのサマリーが載せられているので、そこから先に読んでもいいだろう。

5) クリニカルエビデンス・コンサイス (北村 2008)

クリニカルエビデンス (Clinical Evidence) は、BMJ Publishing Group 社が提供しているオンライン・リソースであるが、日本では医学書院からその簡潔翻訳版が刊行されている。当館ではこれを所蔵している。

日常診療で出会う臨床問題（主に治療や介入）に対しての膨大なエビデンスを体系的に解析してまとめたものであり、信頼性の評価は高い。反面、エビデンスの確立していないものは記載されていないので、扱うトピック数は多くない。

各トピックは、「褥瘡発症リスクのある人における予防的介入の効果は？」のようにクリニカル・クエスチョンの形式を採っていて、それに対して、「有益である」、「有益である可能性が高い」、「有益性と有害性のトレードオフ」、「有益性不明」、「有益性に乏しい」、「無効ないし有害である」の6段階にカテゴリー分けをして、各介入方法が評価されている。

5. 文献入手サービス

求める文献が印刷版でもオンライン版でも本学では調達できないとなると、他機関から取り寄せることとなる。

現在では、当館のホームページから文献入手の申込をすることができる。「My ないと」と呼んでいるそのサービス内容は以下の通りである。

1) 資料検索

基本的には当館ホームページ TOP 左側メニューにある「所蔵資料検索」と同様であるが、検索結果を「My 本棚」に保存しておくことができる。興味深い資料を見つけたときの備忘録代わりにできる。

2) 貸出・予約状況

現在の自分の資料貸出状況や貸出予約状況が確認できる。自分が今何冊借りているのか、返却期限はいつまでなのかを確認するのに便利である。

3) 希望資料申請

本学にない資料で、雑誌論文の複写物を入力するには「複写依頼」、単行本そのものを借りるには「貸借依頼」を申請することができる。

利用マニュアルは当館ホームページ TOP の中ほどにある「学内向け>文献複写申込方法>Windows ユーザーの方」から PDF ファイルをダウンロードできる。

Macintosh ユーザーの方には申し訳ないが、「My ないと」サービスメニューの動作が一部不安定となるので、指定のアドレス宛にメールでお申込いただきたい。

申請を受けてから担当者は資料の所在を確

認するが、当館で所蔵していたり、電子ジャーナルで入手できる場合も多く、そのときには申請者へ連絡し、「申請却下」としている。

担当者の所蔵確認後、他機関へ申し込むこととなるが、国内で所蔵している場合や国内に無い場合でも米国の NLM で所蔵している場合は大抵数日以内に資料が届く。その際に申請時のメモ欄に記入された連絡手段で担当者から実費額も含めて連絡が行くので、速やかに当館までご足労いただきたい。実費料金と引き換えに資料をお渡しする。なお、その料金を後から研究費等で精算することも可能であるので、当館で発行する領収書および文献複写通知票を保管しておいていただきたい。

入手を急ぐ場合は、次の3種の手段がある。

(1) 速達

平日3日以内には届くが、速達料金が加算される。

(2) FAX

即日または翌日に届くが、受け付けている機関が限定される。

(3) DDS (文献画像伝送サービス)

即日または翌日に届く。PDF ファイルなどで当館へ届くので FAX よりも鮮明であるが、印刷して渡した後は消去するよう決められているので、ファイルで入手することはできない。DDS を受け付けている機関が少ない上に、DDS での提供を認めていないタイトルも多いので、その際は FAX が速達となることもある。

4) パスワード変更

今では様々なサービスで個人認証のためのパスワードが必要となっている。「My ないと」も例外ではない。希望資料申請の履歴が蓄積されるので、他人に漏れると個人の研究テーマが漏れることになる。少なくとも初期のパスワードからは変更していただきたい。

もし、パスワードを忘れた場合は、当館へ連絡をいただければ、初期値に変更させていただきます。

この「My ないと」サービスを受けるには、まず図書館の利用登録が必要である。その後

に「My ないと」の利用申請を受け付けている。

IV おわりに

ここで紹介したオンライン・リソースはすべて当館ホームページからアクセスできる。その他にも役立つサイトを「おすすめ」リンク集や「業務関連」リンク集の中で紹介しているので、読者諸氏にとって思わぬ発見があるかも知れない。

当館スタッフは医学・看護関連情報を扱うプロフェッショナルであるという自負と責任を持ち日々研鑽を重ねている。当館が加盟している特定非営利活動法人日本医学図書館協会では、“ヘルスサイエンス情報専門員”という認定資格を設け、キャリアやスキルに応じて基礎・中級・上級の3ランクを定めている。筆者は上級を取得しているが、他のスタッフへも取得を推進し、スタッフ全員の更なるスキルアップを図っていきたく思っている。

また、「ないとブログ」、「闘病記文庫」、「オピニオン・ボックス」を開設するなど、利用者の利便性を向上すべく、新しい取り組みにもチャレンジしているところである。

当館が提供するサービスならびにリソースを教育・研究活動に大いに活用していただきたい。

最後に、読者諸氏の当館に対するご意見、ご要望をお聞かせ願いたい。少しでも利用者のニーズに合ったサービスを展開していきたく思っている。メールやオピニオン・ボックスにお寄せいただければ幸いです。

謝辞

筆者が抱える懸念をご理解いただき、貴重な紙面を割いて、当館のサービスを紹介する機会を与えてくださった編集部会長の瀬川先生はじめ、編集部会の方々に感謝いたします。

参考文献

- 飯田幸生 (2008) : DynaMed でエビデンスを手軽に手に入れよう. EBM ジャーナル, 9 (6) : 690-696.
- 北村大 (2008) : Clinical Evidence. EBM ジャーナル, 9 (6) : 697-703.
- 小林健二 (2008) : ACP-PIER. EBM ジャーナル, 9 (6) : 686-689.
- Murrell G., Huang C., Ellis H.著, 稲田英一訳 (1992) : 医学研究 (知っておきたいプロセスとノウハウ). 総合医学社.
- 佐藤淑子, 和田佳代子 (2000) : 看護文献・情報へのアプローチ(JJN スペシャル, 65). 医学書院.
- 佐藤淑子, 和田佳代子 (2004) : ナースのための Web 検索・文献検索テクニック(JJN スペシャル, 76). 医学書院.
- 時実象一 (2007) : 電子ジャーナルのオープンアクセスと機関リポジトリ (どこからきてどこに向かうのか) (I)オープンアクセス出版の動向. 情報の科学と技術, 57(4) : 198-204.
- 土屋俊 (2004) : 学術情報流通の最新の動向(学術雑誌価格と電子ジャーナルの悩ましい将来). 現代の図書館, 42(1) : 3-30.
- 山本舜悟 (2008) : UpToDate の使い方. EBM ジャーナル, 9 (6) : 680-684.
- 吉村学 (2008) : The Cochrane Library. EBM ジャーナル, 9 (6) : 672-678.